説教要旨「地の果てに至るまで」

使徒言行録２章１～１２節

ペンテコステの出来事において弟子たちに降った聖霊は、彼らに新しい舌、新しい言葉を与え、語る力を与えました。弟子たちは、聖霊の力によって、様々な国々の言葉で語っていったのです。それは、創世記の第１１章における「バベルの塔」の物語において起ったことの反対であり、その解決が示された出来事です。

バベルの塔の物語は、「世界中な同じ言葉を使って、同じように話していた」ということから始まっています。その人間たちが、天にまで届くような塔を建て始めるのです。「天にまで届く」というのは、人間が神に成り代わろうとすることを象徴しています。神様は、人間のそのような傲慢の故に、人間の言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられないようになさったのです。つまりこのバベルの塔の物語は、人間が神になり、主人になろうとしていく時に、人間どうしの言葉が通じなくなる、コミュニケーションが失われる、そして、共に生きることができなくなって行くことを表しています。

ペンテコステの出来事によって、共に生きることが出来なくなってしまったこの世界が、再び一つとされ共に歩んで行く道が教会に示されたのです。それぞれの言葉の違いはあります。それを統一して同じ言語を語らせる事が目的ではありません。それぞれの言語、文化の違いが尊重されながら、しかし皆が同じ神の偉大な業を語る言葉を聞く、つまりイエス・キリストの十字架と復活による神様の救いの恵みを聞くのです。このことによって、言葉の違う人々が一つになされるのです。神に成り代ろうとする傲慢によって言葉が通じなくなり、共に生きることができなくなってしまった人間が、聖霊の働きによって力を与えられた弟子たちによって主イエス・キリストにおける神の偉大な救いのみ業を語るのを聞くときに、様々な違いを乗り越えて、一つとされてゆくのです。

（２０１８・５・２０　説教者：稲垣真実）